

2026年3月21日（土）、大阪教育大学みらい教育共創館において、公益財団法人教科書研究センター・大阪教育大学共催のみらい教育セミナーが行われました。このセミナーでは、「英語の学習者用デジタル教科書を活用した授業づくりと教員研修モデル—4教育大学による実践研究の最終報告会—」と題し、4つの大学（愛知教育大学、大阪教育大学、兵庫教育大学、鳴門教育大学）が、公益財団法人教科書研究センターと連携し、3年計画で行った「英語の学習者用デジタル教科書の活用に関する研究」の成果を報告・共有しました。

私たちも、本学小学校英語教育センターにおいて、「小学校外国語教育におけるデジタル教科書を活用した授業づくりに関する研究」と題して行ってきた研究の成果と課題を発表しました。具体的には、学習者用デジタル教科書を活用することで、児童の主体的学びと協働的な学びが生まれること、ただし、個別「最適」な学びを実現するには、探究的な学びのもと教師の働きかけが重要であることを、アンケート調査の結果や協力校における試行授業の成果と課題をもとにお話しました。そして、「不易と流行」ということばをもとに、主体的、探究的な学びという教育の普遍的な課題と、デジタル教科書の活用という教育の新しい課題とをつなげる「教師の役割」を検討していくことの必要性について強調しました。

4大学の研究発表後には、パネルディスカッションが行われました。デジタル教科書と技能育成や言語活動との関係、教材・教具におけるデジタル教科書の位置づけ、デジタル教科書活用のための教員研修など、さまざまな点から意見交換が行われました。小学校外国語教育におけるデジタル教科書の活用の今後の方向性について多くを学ばせていただく機会となりました。（小学校英語教育センター所長・教授 山森 直人）

2026.03.21（土）みらい教育セミナー  
**英語の学習者用デジタル教科書を活用した授業づくりと教員研修モデル**  
～4教育大学による実践研究の最終報告会～

「令和の日本型学校教育」を実現するため、我が国の教員養成と研修において先導的・革新的な取り組みを行い、牽引役となっている愛知・大阪・兵庫・鳴門の4つの教育大学が、公益財団法人教科書研究センターとの連携の下、「英語の学習者用デジタル教科書の活用に関する研究」で得られた知見を活かし、実践研究の成果や課題を共有し全国に向けて発信します。

(プログラム)

13:00～	受付開始
13:30～	開会挨拶（セミナー趣意説明）
13:35～	発表① 鳴門教育大学教授 山森 直人氏、特命准教授 佐藤 美智子氏 「小学校外国語教育におけるデジタル教科書を活用した授業づくりに関する研究」
13:55～	発表② 大阪教育大学教授 加賀田哲也氏、枚方市教育委員会指導主事 高橋瑞人氏 「子どもが主体的に学ぶ環境づくりとデジタル教科書の活用」
14:15～	発表③ 愛知教育大学 教授 建内 高昭氏 「コミュニケーションを活性化する英語授業の開発—ICT機器の活用を通して—」
14:35～	発表④ 兵庫教育大学准教授 松田 克氏、講師 鳴海 智之氏 「デジタル教科書活用に関する教員のニーズと能力に基づく教員研修モデルの開発・実施・改善」
15:05～	パネルディスカッション（発表者及び参加者による質疑応答、意見交換等）
15:55～	講師・まとめ
16:00	閉会

（同セミナーのチラシを部分的に抜粋）

## 新セミナー「放課後学びの広場」の試行

現行学習指導要領の全面実施から5年が経過し、令和5年度「全国学力・学習状況調査」では、「英語の勉強が好き」と答えた児童は69.2%と、平成25年度より7%減少しました。私たちは、その背景に、指導者の多様化、長年小学校外国語教育を支えてきた教員の退職による知見の継承不足、中学校・高等学校のような教科担任制ではないことによる外国語教育に関する研修機会の限界などがあるのではないかと考えます。その結果、理念や指導・評価等について十分に学ぶ機会が得られないまま、不安を抱え、悩みながら実践している先生方が少なくないのではないかと推察されます。

そこで本センターでは、立場や世代を超えて学び合う場として「放課後学びの広場」（オンラインを原則として月2回程度、17:30～18:30に実施）を企画し、本年度は9月より全7回、試行的に実施しました。参加者は、勤務終了後の教室やご自宅から参加。研修の内容は、学習指導要領改訂に向けたワーキンググループの議論や資料の共有をはじめ、「指導案の検討」「単元導入の工夫」「ICT活用」など、参加者のニーズに応じたテーマを扱いました。

参加者からは、「同じ悩みを共有でき前向きになれた」「経験豊富な先生方の実践から多くを学べた」「指導案の検討が大変参考になった」「若手教員の悩みを知ることができ有意義だった」といった声が寄せられました。

試行を通して、対話と共有の場が教員の安心感や意欲の向上につながることを実感しました。今後は内容のさらなる充実と参加形態の工夫を図り、継続的な学びの場として発展させていきたいと考えています。

本年度の試行実施にご参加くださった先生方、ありがとうございました。（特命准教授 佐藤 美智子）



## 高知市立義務教育学校土佐山学舎への訪問

2月19日、鳴門教育大学大学院グローバル教育コースの5名の学生とともに高知市立義務教育学校土佐山学舎を訪問し、5つのクラスで英語授業に参加しました。私を含めた参加者の出身国は、ギニアビサウ、モザンビーク、パプアニューギニア、バヌアツ、日本、カナダの6か国でした。土佐山学舎は、約3年前から、毎月、私たちを受け入れてくださっています。通常は、1日に1学年から6学年までの4、5クラスの英語授業に参加させていただいています。今回も5クラスに参加させていただきました。

授業では、通常、児童が少人数のグループに分かれます。私たちはグループごとに分かれ、英語の授業で学んだことについて話し合います。時には、児童たちとゲームをしたり、総合的な学習の時間の課題に関連した具体的な質問を受けたりすることもあります。土佐山学舎の先生方は、私たちの訪問にあたって、常に目的を設定し、児童たちの学習内容と関連するよう尽力されています。このようなかたちで、私たちの訪問は、1学年から6学年、そしてそれ以降の学年のカリキュラムに組み込まれています。今回は児童たちが土佐山町の素晴らしい場所を紹介し、私たちは3つのヒントゲームを行い、子どもたちに自己紹介をして名刺を交換しました。

小学校英語教育センターの一員として、私は訪問活動が児童の学習意欲に与える影響に関心を持っています。児童たちが、これらの授業を心から楽しんでいることをさまざまな点から確認することができます。研究の観点からは、その効果を客観的かつ記述的に分析したいと考えています。最近児童たちにアンケートを実施したところ、訪問の好影響が確かに示されました。ただし、私たちの訪問の主眼は研究活動ではなく、学校の素晴らしい先生方のご指導のもと、児童の英語の学びを支援することにあります。土佐山学舎での取り組みにはいつも感銘を受けています。

徳島県内では鳴門教育大学の留学生による同様の訪問が複数校で行われています。土佐山への訪問はとても光栄な機会となっています。今後、みなさんの学校への訪問を喜んで承ります。



(准教授 ジェラード・マーシェソ)

## 学習者用デジタル教科書を活用した授業づくり

～全国小学校英語教育実践研究大会での発表から～



本センターは、平成29年度に佐那河内村と包括連携協定を結び、英語教育の発展を支援しております。令和5年度からは、公益財団法人教科書研究センターの委託研究「小学校外国語教育におけるデジタル教科書を活用した授業づくり」の協力校である同校と共に研究を進めてまいりました。

この度、京都市で開催された「全国小学校英語教育実践研究大会第2分科会(令和8年1月31日)」にて、共同研究の成果を発表する場をいただきました。協力してまとめた内容を「主体的に学び、自分の考えや気持ちを表現する児童の育成」と題して、外国語担当の堀井晴美先生が報告をしました。

デジタル基盤を活用する成果として3つのことが挙げられました。繰り返し音声を聞くことで英語のリズムやアクセントに気付き、自発的に発音を修正する児童の姿が見られるようになったこと、自身の成長や課題に向き合うことで、学ぶ楽しさや達成感が高まり、前向きに取り組む姿勢が育まれたこと、さらに、個別学習で発話に自信が付き、協働的な学びの創出が見られたことです。しかし、技能面や主体的な態度の育成では効果が見られた一方で、言語活動の時間を十分に確保するための授業構成や、デジタル教科書を用いた「読む・書く」活動のあり方が今後の課題として示されました。

学習者用デジタル教科書は、主体的・対話的で深い学びを実現する有効な手段となります。しかし、その効果を最大化するには、授業形態の工夫や児童一人一人への的確な見取りと支援が不可欠であり、指導者の授業力が今後ますます重要になることが、参加された多くの先生方に共有されたと感じました。

今後も本センターは、外国語教育を取り巻く時代の変化に柔軟に対応しながら、学校現場で必要とされる支援に努めていけたらと考えております。

(コーディネーター 竹内 陽子)

